

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02391

研究課題名（和文）ナチス期ドイツにおける幼児教育と家族に関する社会史的研究

研究課題名（英文）Historical research on early childhood education and the family in Nazi Germany.

研究代表者

小玉 亮子（Kodama, Ryoko）

お茶の水女子大学・基幹研究院・教授

研究者番号：50221958

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ナチス・ドイツにおいて、幼児教育がどのような役割を果たしたのかを明らかにすることを目的としている。分析対象は、ドイツの幼児教育の中心にあったペスタロッチ・フレーベル・ハウスの活動である。特に、ヴァイマル期以降のキーパーソン3人の女性たち、リリー・ドレシャー、ヒルデガルト・フォン・ギールゲ、ヘニー・シューマッハーについて分析を行った。この分析を通じて、ナチス期に幼児教育がその勢力を拡大させていったことが明らかになると同時に、幼児教育における母性イデオロギーや中産階級の道徳がナチスの思想に歓迎されたことを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、ナチス・ドイツのペスタロッチ・フレーベル・ハウスの活動の分析を通じて、ナチス期に幼児教育がその勢力を拡大させていったことが明らかになると同時に、幼児教育における母性イデオロギーや中産階級の道徳がナチスの思想に歓迎されたことが明らかになった。この結果は、母性イデオロギーや中産階級の道徳のみでは、全体主義の動きに対して迎合するものとなりうる危険性があることを示すものであると言える。この成果から本研究の意義は、子どもに対する母親の役割の強調や、社会道徳の教育を強調するような今日の教育のあり方に対して、それが持つ陥穽を示唆することにより、再検討を迫る問題提起をした点にあると言える。

研究成果の概要（英文）：This study aims to determine what role early childhood education played in Nazi Germany. The subject of analysis is the activities of the Pestalozzi Floebel Haus, which was at the heart of early childhood education in Germany. In particular, three key women from Weimar onwards, Lily Drescher, Hildegard von Gierke and Hennie Schumacher, were analysed. Through this analysis, it becomes clear that early childhood education expanded its power during the Nazi period and that maternal ideology and middle-class morality in early childhood education were welcomed into Nazi thought.

研究分野：教育学・西洋教育史

キーワード：幼児教育 ジェンダー 社会史 ドイツ ナチス ペスタロッチ・フレーベルハウス 母なるもの

1. 研究開始当初の背景

本研究の学問的背景には、二つのポイントがある。一つは、近年ドイツにおいて、戦争と子どもというテーマの研究が重視されるようになったこと。もう一つは、これまでナチズム期における幼児教育に関する研究が必ずしも十分なされてきたとは言えないという反省がある。

第一の学問的背景には、ここ 10 年ほどドイツ史において、戦時下の幼い子どもの研究が進められるようになってきたことがある。周知のようにドイツ史においてナチス期の研究はもっとも精力的に解明が進められてきた分野ではあるが、戦時期の子どもたちというテーマが注目されるようになったのは 1990 年代以降、特に戦後 60 年となる 2005 年あたりからであると指摘されている(芝 2016)。現在では、次から次へと、ドイツにおける戦中・戦後の子どもたちの自伝的証言や記録が分析され、出版され、戦時下の幼い子どもたちの生活や、戦後の子どもたちいる家族の暮らしが次第に明らかにされるようになってきている(Bode 2004, Doerr 2007)。この時代、確かに幼稚園に通う子どもの数は、それほど多かったとはいえない。しかし、戦争という苦難のもとでの幼い子どもたちの生活が次第に明らかになるにつれて、幼児の生活の一つとして、幼児教育において何がなされ、何が目指されたのかが問題となってきた。さらに、家族史研究においても、子どもの問題が問われる時に、幼児教育において家族はどのように見られていたのかが、重要な論点となってきている。こう考えると、ナチス期の幼児教育は単なる幼児教育の通史の中の一部としてではなく、ナチス期における家族と子どもという視点からも分析される必要があると考えられる。

第二に、ナチス期の教育システムにおける幼児教育の位置付けが未だ十分解明されていない、という問題がある。ナチス期の学校教育や社会教育における研究は、ナチス期の政治経済史あるいは日常生活史分析と同様に精力的に研究が進められてきた。ではなぜ、これまで、ナチス期の幼児教育についていくつかの研究はあるものの(Wolters 1998)、必ずしも注目されてこなかったのか。その理由の一つと思われるものに、ナチス期において、フレーベル・カルトともいえるフレーベルの礼賛がナチスによってなされてきたという歴史的事実がある。このことがドイツで全く知られていない、というわけではない。しかし、この事実は、幼児教育研究に携わるものにとってその原点たるべきフレーベルとナチスが結びつく、いわば触れられたくはない歴史であるとも言えるのではないだろうか。

このような状況に対して、この時代を扱った数少ない研究の中には、フレーベルの思想がナチスによって残念ながら利用されたとするものもある(Mitzenheim 1993)。確かに、ナチスに利用されたという側面は否定できないだろう。しかし、なぜ、ナチスにとってフレーベルの思想が利用可能だったのか、という問いも成り立つのではないか。ナチス期に入って、当時注目され、論争となっていたモンテッソリーの思想がたちまち姿を消し、フレーベル一色になったことは、モンテッソリーがイタリア人でありフレーベルがドイツ人であったことの違いもあるだろうし、論争を認めない全体主義の体制の所産であるとも考えられる。しかし、そこには、モンテッソリーの思想がナチスと相入れない点があったのではないか、裏返せば、単にフレーベルがナチスに利用されたというだけではない、フレーベルの思想が持つナチスに利用される内在的な理由があるのではないかという問いも成り立つ。だとしたら、ナチス期の幼児教育とそこで議論された思想を分析することは、現代に決定的な影響を与える幼児教育のそれ自体の持つ課題を明らかにするものとなるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

以上のような学問的な状況に基づき、本研究は、ナチス・ドイツにおいて、幼児教育はどのような役割を果たしたのか、そして、なぜ、そのような役割を果たすこととなったのかを明らかにすることを目的とした。これまで必ずしも正面から論じてこなかったこの問題を検討することは、ドイツの幼児教育のみならず、幼児教育それ自体が持つ課題に迫りうる問いであると言える。

この目的のために、1920 年代から 1940 年代においてドイツの幼児教育の中心にあったドイツ・フレーベル連盟(Deutsche Fröbel-Verband)の有力なメンバーの一つであったペスタロッチ・フレーベル・ハウス(Pestalozzi-Fröbel-Haus)の活動に注目し、それらの活動とナチスの関係について明らかにすることを試みることにした。

3. 研究の方法

本研究でペスタロッチ・フレーベルハウスの活動を分析するにあたり、扱う主な資料は、ドイツ・フレーベル連盟が刊行してきた機関誌『幼稚園』(Kindergarten)とペスタロッチ・フレーベル・ハウスが刊行してきた機関誌『ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの卒業生のための雑誌』(Verein=Zeitung der ehemaligen Schulerinnen des Pestalozzi=Fröbel=Hauses 1)である。このほか、女子教員組合で刊行してきた雑誌等、また、当時の関連書籍等を分析資料とした。こういったペスタロッチ・フレーベルハウスの関連刊行物を取り上げる理由は、これらがドイツの幼児教育界を牽引してきた幼児教育におけるもっとも有力な団体に関する資料であると同時に、その名の通りフレーベルの幼児教育思想を継承する団体であることによる。そして何より、この

団体は、ナチス期において様々な教員団体が解消・解体させられていく中で、1934年以降も解体されることなく、それどころかナチス体制を支える教員組織の一部となりつつ活動を行った。これらの団体がナチス期に入ってもなぜ活動を続けることができたのか、この問いは、これまで議論されてこなかった幼児教育思想の核心に迫る独創的な論点となると考えられる。

これらの資料を分析する際に留意したことは、以下の2点である。

第一に、取り上げる時期である。ナチスが政権を奪取した1933年以前のヴァイマル期のものも含んで、戦前戦後を視野に入れて分析することとした。ナチスが政権をとったのち、様々な制度や団体が廃止されたり排斥されたりするという大きな変化が生じたが、他方で、ナチスが政権をとる前からそこへの助走が始まっていたことに留意したいと考えているためである。ナチス期の前後で、幼児教育において何が否定され何が継承されたのか、その分断と連続を見ていくことが重要であり、政権の変化の前後の議論を見ることで、ナチス期における幼児教育の特質をより明らかにできるためである。

第二に、この時期に活動した人々の人間関係に注目することとした。ペスタロッチ・フレーベルハウスで中心的に活動した人物たちに光を当てつつ分析を進めることでこの団体の特徴と、ひいては、幼児教育の抱えた課題に迫ることを試みた。具体的には、ヴァイマル期以降のペスタロッチ・フレーベルハウスの校長を務めたリリー・ドレシャーと彼女と共同で副校長をつとめたヒルデガルト・フォン・ギールケ、さらに教員であったヘニー・シューマッハーに注目しながら、この組織を動かしていった人物たちと、その人間関係の分析を進めた。彼女たちには、必ずしもこれまで教育史上で重要な人物としてスポットライトが当たってきたわけではない。彼女たちのようないわば無名の人々の人間模様から、怒涛の時代の幼児教育の矛盾と葛藤を逆照射できるのではないかと考えた。

第三に、この時代の幼児教育の思想をジェンダーの視点から、どのような特徴を持つものであるのかに分析の焦点を当てることを試みた。ナチスによって、ほとんどの教育段階でそれまでの組織の解体が進められた中であって、ペスタロッチ・フレーベル・ハウスが解体されることなく活動を続けられた意味を明らかにするために、そこで、どのような思想で、活動が行われてきたのか、再検討する必要があると考えた。特に注目するのは、ここで実施されていた母親学校というプロジェクトである。この活動に代表されるように、幼児教育と母親なるものとの関係は、ナチス期における幼児教育が、家族と国家のどのような関係を支えたのかについて分析する上で、重要な鍵を握るものである。この分析のためには、まさに、ジェンダーの視点からの検討が求められるところである。幼児教育をその制度や内容を吟味するといった狭い枠にとらえることを超えて、幼児教育の分析を通して、ジェンダーの視点から国家（ファシズム体制）と家族の関係を問うというテーマを射程に入れることができると考えた。

4. 研究成果

令和元年度から途中コロナ禍を挟んで、ペスタロッチ・フレーベルハウスの人間関係にスポットを当てつつ、分析を進めてきた。この間の研究成果は大きく分けて、三点にまとめることができる。第一に、幼児教育における母性イデオロギーについて、第二に、幼児教育のポリティクスについて、第三に、幼児教育から見えるジェンダー問題、である。

母性イデオロギーについて

幼児教育と母性の関係については、本研究を進める前からすでに分析を進めてきているが（小玉2008, 2011, 2016等）今回の研究では、この問題について、ペスタロッチ・フレーベルハウスの校長を務めたリリー・ドレシャーとその恩師であるヘンリエッテ・シュラーダー＝プライマンとの関係から検討を行った。シュラーダー・プライマンの論じた「精神的母性」という概念は、当時の保守的女性運動の理論的基盤の一つとなった重要な思想である。ドレシャーはシュラーダー・プライマンの思想を継承するだけでなく、当時の女性運動の中心的人物である、ゲルトルト・ボイマーとの交流を持つなど、母性イデオロギーを拡大したとも言える議論を展開した。その結果、1920年のヴァイマル共和国になって最初のドイツ全国学校会議において、ドレシャーは、幼児教育は、母親による家庭の教育に及ぶものではないという議論を展開し、学校教育段階から幼稚園を外すことを主張した。その結果、ドイツでは、結果的に幼児教育を学校教育の系列外と位置付けることとなった。

このことは、ドイツの幼児教育がのちのナチスの母性重視の議論との親和性を持つことになる道をつけ、さらに、ペスタロッチ・フレーベルハウスのナチス期の拡大の基礎となる。これについては、小玉亮子, 2022, 「20世紀初頭のドイツにおける幼児教育の展開 ペスタロッチ・フレーベルハウスに焦点をあてて」(幼児教育史学会/小玉亮子・一見真理子編, 『幼児教育史研究の新天地 下巻 幼児教育の現代史』萌文書林, 14-38)において、詳述している。

幼児教育におけるポリティクス

ペスタロッチ・フレーベルハウスの個々人の人間模様に注目することで、そこには、政治的な対立の側面と、非政治的な関係の側面という、二つの方向から幼児教育を見る必要があることが明らかになった。

ここでいう、政治的な対立とは、ペスタロッチ・フレーベルハウスという一つの組織の中でもまた、ドイツ全体を取りまく政治的な対立の構図が生じていたことを指す。ヴァイマル期は世界

史上でも稀に見る民主的な憲法を擁するものとしてスタートしたという側面もあるが、他方で、政治的対立と騒乱、経済的困難の時期でもあった。このことがのちのナチスを産むということはずでに指摘されてきたところである。この混乱の只中であって、ペスタロッチ・フレーベルハウス内においてもまた政治的抗争が展開された。今回の研究では、この点について、すでに述べた校長のドレシャーと、一教員であったヘニー・シューマッハとの関係から分析を行った。ヘニー・シューマッハは、若くして当時の複数の雑誌に、フレーベル研究やカリキュラム研究などの学術研究論文が掲載されるなどの活躍をしていた論客でもあった。しかしながら、彼女の思想は、幼児教育の義務教育化の推進であって、家庭教育を子どもにとって最も優れたものとするドレシャーの母性思想とはあいられないものであった。社会民主党 (SPD) を支持するシューマッハは、労働者の権利を重視し社会的平等を目指す思想を持ち、それに基づいた活動をしていたことが、ドレシャーとの対立を深めることとなった。両者の激しい対立の末、シューマッハはペスタロッチ・フレーベルハウスを去ることになるが、この動きは、ヴァイマル共和国における社会民主主義の困難を反映しているという側面は否めない。また、シューマッハの排除によって、ペスタロッチ・フレーベルハウスでは、早々に、社会主義を一掃しようとするナチスの時代の準備ができていた、とも言える。これについては、小玉亮子, 2022, 「幼児教育におけるジェンダー・ポリティクス -ペスタロッチ・フレーベルハウスとナチズムの関係に着目して-」(日本教育学会編『教育学研究』89(4):27-39)において詳述している。

ポリティクスにかかるもう一つの側面は、政治的な動きが、実は非政治性によって支えられているという側面である。これについては、一時期、ドレシャーと共に共同校長になった、ヒルデガルト・フォン・ギールケの軌跡を分析することから明らかにすることができた。フォン・ギールケもまた、若くしてさまざまな活動をしてきた人物であり、ドレシャーの信任も厚く、ペスタロッチ・フレーベルハウス内外で幼児教育に対して大きな貢献をしてきた人物である。社会活動を重視する異色の保守法学者を父にもつフォン・ギールケは、国粋主義的な環境で育ちながら、子どもたちのために社会奉仕することに一生を捧げ、また、幼児教育の高度化、専門職化の尽力した。彼女の仕事の中でとりわけ特筆すべきこととしては、幼稚園教育者の国家試験の制度化に尽力したことなどをあげることができる。国粋主義的な思想の中で育ったフォン・ギールケは、ナチスの登場を歓迎していたとも言われているが、ナチスが政権をとるや否や、母親がユダヤ人のルーツを持つことから、ペスタロッチ・フレーベルハウスから追放されることになる。ナチス下では地方で静かに子どもへの奉仕活動をするが、戦後は、旧東ドイツの幼児教育のカリキュラムを作成するなど社会主義幼児教育制度の整備に従事した。こういったフォン・ギールケの軌跡は、ポリティカルな観点から見ると錯綜していると言わざるを得ない。国粋主義的な思想からナチスを支持したものの、自身はナチスから排除され、戦後は社会主義に貢献する。政治的には左右に振り切れていったフォン・ギールケの政治的スタンスは一貫性のないものであるといえるが、しかしながら、子どもへの献身・国家への奉仕(それがいかなる国家であったとしても)という点では一貫した姿勢を貫いているとも言える。たとえ、いかなる時代にあっても子どもへの献身を貫くという非ポリティカルな理念が、結果的にポリティカルな動きに呼応してしまうことも、幼児教育において起こりうる矛盾した状況を生み出すことを明らかにすることができた。これについては、小玉亮子, 2024, 「激動の二〇世紀を「よき教師」として生きる - ヒルデガルト・フォン・ギールケの場合」(『歴史評論』889:17-31)に詳説した。

幼児教育から見えるジェンダー問題

上記のように明らかにした幼児教育における母性イデオロギーも、幼児教育の場で生じた力関係をめぐる対立・葛藤といったポリティクスも、いずれもその背後にジェンダーの問題がある。女性の地位向上や社会進出を後押しすることを目指した「精神的母性」、幼児教育を家族に劣るものとする見ることとなり、結果的に幼児教育の高度化を阻止するものとなる。どのような時代においても、子どものために献身し、国会の奉仕するという姿勢の背後には、献身・奉仕をその中核的理念とする中産階級の娘としての「よき教師」としての信念があり、それは、時にファシズムをも支える力を持つことになることが明らかになったと考えている。

これについては、小玉亮子, 2020, 「幼児教育の変遷」(小玉亮子編『幼児教育』ミネルヴァ書房, 15-28.) 小玉亮子, 2023, 「幼児教育」(山口みどり・弓削尚子・後藤絵美・長志珠絵・石川照子他編『論ジェンダー史』ミネルヴァ書房, 62-63.) 小玉亮子, 2023, 「女子教育の目的と手段」(姫岡とし子・久留島典子・小野仁美編『<ひと>から問うジェンダーの世界史 第2巻「社会」はどう作られるか?』大阪大学出版会, 202-205.) 小玉亮子, 2023, 「教育史に見るケアリングから、ジェンダー/統治/教育を考える」(『日本の教育史学』66:98-101.) 小玉亮子, 2023, 「戦争と復興の時代の幼児教育」(幼児教育史学会編『幼児教育史研究』18:42-49.) 等で議論を行っている。

以上のように、本研究ではナチス期の幼児教育について、とりわけそれを準備したプロセスとそこで見られた変化について重点を当てて検討を行ってきた。このことによって幼児教育に根強い、母性イデオロギーや政治的な力学を見ることができたが、他方で、その後に与えた影響については、示唆をするにとどまっている。今後の課題としては、ヴァイマルからナチス期にかけて展開してきたドイツの幼児教育のあり方が、その後、どのような問題を生じさせてくのか、そして、そのことが私たちに何を示唆するのかを明らかにすることであると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 小玉亮子	4. 巻 889
2. 論文標題 激動の二〇世紀を「よき教師」として生きる - ヒルデガルド・フォン・ギールケの場合	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小玉亮子	4. 巻 18
2. 論文標題 戦争と復興の時代の幼児教育	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 幼児教育史研究	6. 最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20658/youjikyokushi.18.0_42	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小玉亮子	4. 巻 89(4)
2. 論文標題 幼児教育におけるジェンダー・ポリティクス - ベスタロッチ・フレーベルハウスとナチズムの関係に着目して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11555/kyoiku.89.4_539	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小玉亮子	4. 巻 119-4
2. 論文標題 社会の視点から考える幼児教育の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 幼児の教育	6. 最初と最後の頁 34-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小玉亮子
2. 発表標題 ジェンダー/統治/教育を考える
3. 学会等名 教育史学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小玉亮子
2. 発表標題 戦争と復興の時代の幼児教育について
3. 学会等名 幼児教育史学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小玉亮子
2. 発表標題 幼児教育と母なるもの：戦争と復興の時代のペスタロッチフレーベルハウス
3. 学会等名 ジェンダー史学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小玉亮子
2. 発表標題 ペスタロッチ・フレーベルハウスとナチズム
3. 学会等名 幼児教育史学会第17回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小玉亮子
2. 発表標題 ジェンダー史の視点にたつ教育史研究の展開
3. 学会等名 ジェンダー史学会2021年度セミナー「教育×ジェンダー×歴史」（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 山口みどり・弓削尚子・後藤絵美・長志珠絵・石川照子編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 303
3. 書名 論点・ジェンダー史	

1. 著者名 姫岡とし子・久留島典子・小野仁美編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 275
3. 書名 人から問うジェンダーの世界史 「社会」はどう作られるか? - 家族・制度・文化	

1. 著者名 小玉亮子・一見真理子編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 萌文書林	5. 総ページ数 389
3. 書名 幼児教育史研究の新地平 幼児教育の現代史	

1. 著者名 小玉亮子編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 210
3. 書名 幼児教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------